

芭蕉辞典

飯野哲二編



芭蕉辞典

飯野哲二編



東京堂出版

編者略歴

大正一〇年東京帝国大学国文学科卒。
東北大学教授、聖和学園短期大学教授
等を歴任。昭和四六年没。
編著「おくのほそ道の基礎研究」「奥
の細道芭蕉俳論」「芭蕉及び蕉門の人
々」「徒然草新評釈」等。

芭蕉辞典

一九五九年九月二五日 初版発行
一九九一年五月二〇日 一二版発行

編者 飯野哲二

発行者 大橋信夫

印刷所 文殊企画有限公司

製本所 渡辺製本株式会社

発行者 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七 (〒100)
電話 東京三三三・三三三 振替 東京三三三

序

或る公共図書館員の談によると、日本文学で相かわらず多くの人々から愛読されているのは、古くは芭蕉、新しいところでは漱石の作品だそうである。また或る高校の国語科担任の先生の話では、教材として取扱った場合には、生徒達の心が多分にひかれるとのことである。また或る有力な俳人は、現代でも芭蕉はわれわれ俳人がかならず一度は通過せねばならぬ関門であるといわれている。このように芭蕉が今なお多くの人々に関心をもたれているのは、その作品のうちに高度なものを内包しながらも、それが読む人の胸に直接ひびいてくるからであろう。芭蕉などは、日本人の心のふるさといっても敢て過賞ではなからうと思う。

ところで、このように多くの人々から親しまれている芭蕉ではあるが、しかし一般に読まれている芭蕉の作品といえば、文章では「おくのほそ道」その他二・三のもの、句では完成期の有名なものにとどまっているのである。従って数多く出ている註訳書も、大抵それらのものを取扱っているのである。もちろんそれだけでも芭蕉の核心を把握することは出来るであろうが、初期から終期に至るまでの作品の展開のあとを辿ってみるならば、芭蕉に対する理解を一層深めることが出来るだろうと思うのである。こうした見地からして、私はかねてから芭蕉の全作品にわたって、わかりにくい語句・語

彙・句や、芭蕉と門人との有機的關係などについて検討していたのであるが、いちおうその稿が成ったので、上述の欠陥をいくぶんでもみたすことが出来るならばと念願して、このたびこゝに「芭蕉辞典」として世上におくることになったのである。

本辞典はもとより一般の芭蕉愛好者を対象として編纂したものではあるが、同時に、芭蕉作品を研究される方のためには、その關係資料（「人名」の部その他参照）を探索する労を省くことに役立たせ、芭蕉の句や文章を教授される方のためには、各方面から基礎的に検討した材料（「出典」や「語法」の部その他参照）を提供して、その真意を明らかにする参考として役立たせ、俳句をつくられる方のためには、芭蕉の発句に対する認識と俳論に対する理解（「句解」の部・「語釈」の部の俳論語その他参照）とに役立たせることにも留意したのである。

本辞典の編纂については、数多い古註や新註にも出来るだけ眼を通して、もっとも正確妥当の見解を本旨としたのであるが、編者の浅学非才のために、なお不備の点が多々あることゝ思う。たゞ本辞典が芭蕉全作品の解明に多少でも縁の下役目を果たすことが出来たとすれば、編者の幸甚とする所である。

おわりに本書の刊行を快諾して下さった東京堂書店の御厚情と、編纂の助手の役をつとめてくれた福田政義・赤羽学・若生小夜・坂野上加代諸氏のお骨折とに対し、こゝに改めて深謝の意を表しておきたい。

昭和三十四年九月十日

編者 識

凡例

一、本辞典は、本篇として左の五部を設け、各部の項目を五十音順に排列して解説した。

(1) 出典の部 芭蕉の文や句を正確に解釈するためにはもちろんのこと、芭蕉の思想傾向や蕉風俳諧形成の要因を知る上においても、その出典探求は欠くべからざる基礎的条件の一つであるから、本辞典はまず芭蕉の全作品にわたってその出典を検討し、本文本句と出典との相互関係を明らかにした。

(2) 語法の部 芭蕉は和漢混淆の独自な新文体を創造しているもので、主要な文を摘出してその語法を検討し、その文の制作心理などを明らかにした。

(3) 語釈の部 全文章のおもなる語句・語彙を摘出して解釈したものであるが、殊に文芸語・思想語・俳論語は芭蕉俳諧の本質探究に重大な関係をもっているのので、これを詳説した。

(4) 句解の部 一見その意の明らかなものを除いて、芭蕉の発句の大半を解説し、秀句に対しては鑑賞的解釈を施した。なお出典の部も参照。

(5) 人名の部 芭蕉の知友・門人について、芭蕉がそれらの人々といかなる俳諧的関係をもったかを重点として解説した。なお参考として、芭蕉に影響を及ぼした和漢の主要な先人についても略述しておいた。

二、本辞典は、本篇の補助として、左の四箇の付録を付して、読者の参考に供した。

(1) 芭蕉作品集 芭蕉の作品を文集と句（発句）集とに分けて、そのほとんど全部を収載した。各作品の下に年号はその成立年時。たゞし「出典」の部では、元禄元年を貞享五年としてある。なお連句関係については「人名」の部を参照。

(2) 主芭蕉研究文献資料 芭蕉を研究するための主要な文献を、伝記その他の項目に分けてあげ、そのおもなるものには略註を付した。

(3) 主芭蕉関係書解題 芭蕉の文章・発句・連句を収載している主要な俳書を、簡単に解説した。

(4) 芭蕉年譜 主点を俳諧関係においた。

三、読みやすくするために、原文の清音を濁音に改め、片仮名を平仮名に改め、カッコして送り仮名を付し、明らかに誤字とおもわれるものにはカッコして正字を補い、文章には句読点を施し、難読語にはルビを付けた。

四、引例文は全部そのまゝの仮名遣にしたが、解説文は現代仮名遣にした。

五、巻末に索引を付した。たゞし人名の部を除く。

目次

本篇

出典の部……………1

語法の部……………107

語釈の部……………213

句解の部……………363

人名の部……………451

付録

芭蕉作品集……………563

主 要 芭蕉研究文献資料……………649

主 要 芭蕉関係書解題……………663

芭蕉年譜……………681

出
典
の
部

〔あ〕

深川夜遊

青くても有るべき物を唐辛子（元禄五年・深川）

紅の色なりながら蓼の穂のからしや人の目にも立てぬは（山家集）

〔註〕この句は「深川」（元禄五年九月から翌年二月まで芭蕉庵に滞在した酒堂が、芭蕉及び門人等と巻いた連句を収む）巻頭の歌仙の発句で、酒堂が「提ておもたき秋の新歟」と脇

を付けている。出典の歌意は、蓼の穂は紅色ながら地味で人目に立たぬのは辛いからであろうかというのであるが、同じく辛い唐辛子は何も赤くならなくとも、青いままで結構ではないかの句意。素地を尊び粉飾を嫌う意を寓している。酒堂はその意を酌んで「使い古した歟でよいのに、新歟のため提げても重い」と付けている。歌の「紅」を「青」に、「からし」を「唐辛子」にかけている。

秋風を耳に残し（おくのはそ道・白川の関）

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白川の関

（後拾遺集・能因法師）

〔註〕これは説明するまでもなからう。「耳に残し」は、かね

がね聞き知っているという意。能因法師は平安朝時代（白河天皇の頃）の有名な歌僧。摂津の古曾部にもいたので、古曾部入道と称せられた。この歌については「古今著聞集」に逸話が伝わっているが、「後拾遺集」には、「みちのくにまかり下りけるに白川の関にてよみ侍りける」という前書がある。

秋風は物いはぬ子も涙にて（元禄二年・卯辰集・山中三両吟）

ものいはぬよものけだものすらだにもあはれなる
かや親の子を思ふ（金槐集）

〔註〕この句の前句は「露まづ払ふ狐の弓竹」である。「狐の弓竹」から出典の歌の「けだもの」に想いが走り、その「ものいはぬ」を「物いはぬ子」で受けて、前句の「露払ふ」を「秋風」と「涙にて」で受けたのであろう。かなり縁語に因っているが、附合としてはわるくない。

秋風や藪も島も不破の関（貞享元年・甲子吟行）

人すまぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後はたゞ

秋の風（新古今集・良経）

〔註〕不破の関址は美濃国松尾村の藤川の岸に在る。出典の歌にも既に関屋の荒れ果てゝいた様が見えているが、芭蕉が通った時はその跡かたもなく、藪や島になっていた。良経の歌を踏んではいるが、「藪も島も」と作者が眼前に見た物を

そのまゝ出して、そこを吹きわたる秋風のうちに実感した「もののあはれ」を、客観的に表現している。

立秋

秋来^{あきき}にけり耳をたづねて枕の風（延宝五年・六百番譜
諸発句合）

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞお
どろかれぬる（古今集秋・敏行）

〔註〕出典の歌には、「秋たつ日よめる」の前書がある。「秋きぬ」を「秋来にけり」とし、「目にはさやかに見えねども」を「耳をたづねて」とし、「風の音」を「枕の風」として、句も同じく「立秋」の感を吟じたものである。この句について、判詞に「秋風枕をおどろかす寐、耳を尋る詞つかひお（を）かし」とあるように、「耳をたづねて」が作者のねらいである。蕉風以前の言葉の技巧の句である。

秋十とせ却て江戸を指（す）古郷（貞享元年・甲子吟
行）

客三舍井州ニ已十霜、帰心日夜憶三威陽一、無レ端更
渡三桑乾水一、却望三井州一是故郷（賈島・度三桑乾一）
〔註〕出典の「十霜」は十年の意。威陽は作者の故郷。桑乾は河の名。この河を渡る時、益々故郷から遠ざかるので、十年間旅舎にいた井州が却って故郷の感があるの意。芭蕉は寛文十二年江戸へ下ったが、延宝四年に一度帰郷した。それか

ら貞享元年までの江戸生活が九年になるので、「甲子吟行」の旅に出発するに際し、「秋十とせ」と吟じたのである。

庵にかけむとて句空が書（か）せける兼好の絵に

秋^{あき}のいろぬかみそつぽもなかりけり（元禄四年・柞
原）

後世を思はん者は糶太瓶（註・ぬかみそを入れる壺）
一つも持つまじきことなり（徒然草九十八段）

〔註〕句の前書によって、この句は、句空（金沢の俳僧・蕉門）が誰かに描かせた兼好の絵の賛であることが知られる。「ぬかみそつぽ」は出典の「糶太瓶」を受けていることはいうまでもない。この清貧高潔な心境と、さわやかに澄み切った秋色とをかけあわせた句である。

秋^{あき}の夜を打崩したる咄かな（元禄七年・笈日記）

年頃公私おんいとまなくて、さしも聞きおき給はぬ世のふる事どもも崩し出でて聞ゆ（源氏物語・明石）

〔註〕この句は九月廿一日大阪の車庸亭で巻いた半歌仙の発句（註・咄が断とある）で、これに対し車庸が「月まつほどは蒲団身にまく」と脇を附けている。出典の文は、明石入道老人が娘を光源氏に奉りたい下心があるので、遠慮しながらも種々言上する条の一筋で、「崩し出でて」は、一くさりずつ片端から語り聞かせること。この「崩す」という言葉を活か

して、句では「縷々としてつきない咄で秋の夜を崩して行く」としたのである。

明^あ(け)ぼの、空^{カラ}靡々として (おくのはそ道・出立)

① 不^フ明^カ、不^フ暗^カ靡々月、不^フ暖^カ不^フ寒^カ悽々風 (白居易・
陵夜有^レ懷)

② たりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき (新古今集春・大江千里)

〔註〕「靡々」とは形容動詞「靡々たり」の連用形で、夜の明け方のほんのりとかすんでいること。出典①の白居易の詩の「不^レ明不^レ暗」に当る。②の歌の前書には「文集(註・白氏文集)嘉陵春夜詩、不^レ明不^レ暗靡々月といへることをよみ侍りける」とある。

明^あぼのやししら魚しろきこと一寸(貞享元年・甲子吟行)

白小群分^{ミナ}レ命、天然二寸魚、細微露^{ツツ}ニ水族、風俗
当^{トシ}三園疎^ニ、入^ニ肆^ニ銀色乱、傾^ニ筐雪片虚、生成猶^{ツツ}捨^ニ
卵、尽取義何如(杜甫・白小)

〔註〕出典の「白小」は白魚のこと。白魚のような小魚でもみな天命を分与されていて、長さ二寸ばかりでもそれが自然にそなわったものだ(これは老荘の思想)という杜甫の詩から暗示を得て、その二寸にも達しない冬の若白魚なので、芭蕉の句では一寸といったのである。この句は桑名海岸での吟である。なお「笈日記」には上五「雪薄し」とあり、「此

五文字いと口おしとて後には明ぼのときこえ侍し」と付記している。

あこくそ(註・阿古久曾一紀貫之の童名)のこゝろも
しらず梅の花(貞享五年・芭蕉句選拾遺)

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にには
ひける(古今集春・貫之)

〔註〕この句は貞享五年初春帰郷の際、門人風表亭においての吟。出典の貫之の歌を踏んでいることはいうまでもない。久々に帰郷してみると、梅の花は昔のまゝに香を放っていると歌意を酌み、歌の「いさ(いや)の意、下に打消の助動詞で受ける」心も知らず」を「あこくそのこゝろもしらず」ともじったのである。

和三角蓼蜋句

あさがほに我は食^めくふをとこ哉(天和二年・虚栗)
つゆもありつ、かへすくも思ひ出てひとりぞみ
(見)つる朝顔の花(山家集)

〔註〕前書の「角蓼蜋句」というのは、同じく「虚栗」に見える其角の「草の戸に我は蓼くふ蜋哉」を指している。芭蕉の句は、其角の美酒を戒めた吟といわれているが、主意はもつと深い所にある。西行の歌は、露の干ぬ間の朝顔の花に、過ぎし日を思い出しながら、しみじみと見入っている情景であるが、芭蕉はその心情を思いやりながら、朝顔の花を眺めて

いると、自分には酒などはいらぬ、唯飯のみで十分にその風情を味あうことが出来ると吟じたのである。わびの生活をあらわした句である。

あさがほや昼は鎖おろす門の垣(元禄六年・閉関之説)

(イ) 豈は交親向ツクニ我疎ナツタ老慵オスガム自愛オモヒ閉門ヘン居ニ (白居易・嘉老慵)

(ロ) 園日涉ニテ以成ヲ趣ス、門雖カドト設セ而常関ニトサセリ (陶淵明・歸去來辭)

〔註〕この句は「閉関之説」の結びとなっている。「炭俵」には「鎖」が「錠」となっている。元禄四年十月下旬関西地方の長期にわたる流浪から江戸へ帰った芭蕉は、「閉関之説」に「人來れば無用の辨(辯)有、出ては他の家業をさまたぐるもうし」とあるように、次第に老慵を感じるようになっていた。したがってこの頃から俳風も「かるみ」へ向って行った。その頃出典(イ)の白居易の「老慵」の詩に同感し、「閉関之説」を物したのであらう。その心境においては(ロ)とも幾分相通ずるものがある。

朝あさぼらけ漕ぎ行く船のあとの白浪に若の枯葉の夢と吹く風も (天和元年・寒夜の辭)

(イ) 世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎゆく舟のあと
の白なみ (拾遺集哀傷・沙弥満誓)

(ロ) 津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたる

なり (山家集)

〔註〕この文の前半は出典(イ)の歌を踏み、後半は(ロ)の歌を踏んだのである。(ロ)の歌は諸所に見える。

芦あしの一夜ひとよの宿かすものあるまじと (おくのほそ道・那古)

(イ) 難波人みそぎすらしも夏かりの芦のひとつに秋をへだてて (新後拾遺集夏・等寺院贈左大臣)

(ロ) 難波江の芦のかりねの一節ひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき (千載集恋・皇嘉門院別当)

〔註〕「芦の一夜」に芦の一節をかけている。竹や芦の節と節との間を一節という。芦は一節の枕詞。芭蕉は出典としてあげた歌を下心にし、「芦の一夜」のうちに一節を寓したのである。

網代守あじろも(る)にぞとよみけん万葉集のすがたなりけり (元禄三年・幻住庵記)

もののふの八十氏河の網代木にいざよふ浪のゆくへしらずも (万葉集卷三雜・人麻呂)

〔註〕「網代守るにぞ」という歌は、万葉集には見えない。出典としてあげた歌を思ひがえしたのであらう。

飛鳥井あすかまき雅章公の此宿しゆくにとまらせ給ひて、都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてゝと詠じ給ひける

を自(ら)かゝせたまひてたまはりけるよしをかたるに、京まではまだ半空や雪の雲(貞享四年・笈の小文・鳴海)

・鳴海

うちひさす都も遠く鳴海渦はるけきうみを中にへだてゝ(何丸編「芭蕉翁句解参考」による)

〔註〕出典の歌の作者飛鳥井雅章は雅宣の子。和歌・書道に通じていた。延宝七年歿。

あすは棕難波の枯葉夢なれや(延宝五年・六百番発句合)

津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり(山家集拾遺)

〔註〕「棕」は端午の節供(五月五日)に祝うもの。句意は、あすはもう五月の節供かと、月日のたつのが速いのに驚いたのである。出典の歌を踏んでいることはいうまでもない。西行の歌には無常観が見られるが、句はそれに擬したまでのことである。

桑名にあそびてあつた(熱田)にいたる

あそび来ぬ鮎釣(り)かねて七里迄(貞享元年・敏篁物語)

水の江の浦島の児が、鰹釣り鯛釣り矜り、七日まで家にも来ずて、海界を過ぎて漕ぎ行くに(万葉集巻九・詠「水江浦島子」二首)

〔註〕この句は「甲子吟行」の旅の途の吟である。桑名と熱田の間は船路七里。出典の歌の「七日」を「七里」、「鰹釣り鯛釣り」を「鮎釣り」、「矜り」を「かねて」(「難き」の意と「兼ねて」の意をかく)と換えて、「をかしみ」を出した句である。

あち東風や面くさばき柳髪(寛文七年・続山井)

氣露風梳新柳髪、氷消浪洗旧苔鬚(和漢朗詠集・早春・都良香)

〔註〕東風は春風のこと。「こち」とよむ。あちらこちらの柳の枝が春風に吹きさばいているのを、出典の「天氣晴れて春風が新柳の髪を梳る」という詩句から発案した句である。この頃の芭蕉の句は、このように貞門風のものであった。

あはの鳴戸は波風もなかりけり(元禄元年・更科紀行)

世の中をわたりくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は波風もなし(伝「兼好詠」)

〔註〕この文は兼好法師の歌といわれる和歌の下句をそのまま引用して、無常迅速の世にありながらも、安穩な日を送っているという意。このように古歌の一片をそのまま取って、文章や句に活用している例が諸所に見られる。

哀かに宮城野のぼた(註・萩)吹凧るらん(天和二年・虚栗・詩あきんどの巻)

(1)宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ(源氏物語・桐壺)

〔口〕荒き風ふせぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞ静心なき(同上)

〔註〕これは其角の「西瓜を綾に包むあやにく」に付けた句。

蕉風初期の句であるから、表現には未だぎこちない所がある。「萩吹潤る」が、出典の歌を踏んでいることはいうまでもない。

あまの子の浪の枕に袖しはれて、家をうり身をうしなふためしもおほかれど(元禄六年・閑閑之説)

白浪のよするなぎさに世をつくす蛭の子なれば宿もさだめず(新古今集雑・説人しらず)

〔註〕出典の歌の「世をつくす」は、一生を暮らしおわること。この歌は「撰集抄」には、須磨に左遷された在原行平の詠としてある。この歌を踏んで「おくのはそ道」の市振の条では、「白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこ(子)の世をあさましう下りて」と叙している。

あまのこ(子)の世をあさましう下りてと叙している。
蛭の古屋に膝をいれて、雨の晴(る)を待(おく)のはそ道・象潟

世の中はかくてもへ(経)けり象潟のあまのこまやを我が宿にして(後拾遺集羈旅・能因法師)

〔註〕「おくのはそ道」の本文にも「先能因島に舟をよせて三年幽居の跡をとぶらひ」とあるように、象潟と能因法師とは関係がふかいので、能因法師の象潟詠が思ひ出されたのであ

る。曾良の随行日記によると、六月十五日酒田を立ち、十八日に酒田に帰っている。前二日は雨天、後二日は晴天となっている。

雨も又奇也とせば、雨後の晴色また頼母敷(き)と

(おくのはそ道・象潟)

水光激瀾、晴偏好、山色空朦、雨亦奇、若把西湖

比二西子、淡粧濃抹、總相宜(蘇東坡・飲西湖上、初

晴後雨)

〔註〕出典の「激瀾」は、水に映った光が波のためにちかちかとゆれること。西子は西施のこと、越王勾踐が戦に敗れて吳王夫差に貢した美人。西湖の晴色雨景と西施の淡粧(薄化粧)濃抹(厚化粧)とを比喻した詩。この文がこの漢詩を踏んでいることはいうまでもない。

端午

あやめ生(ひけ)り軒の鰯のされかうべ(延宝六年・江戸広小路)

「続猿蓑」に見える「稻づまやかほのところが薄の穂」の項の出典参照

〔註〕この句の「あやめ草」は出典の「薄」を、「鰯のされかうべ」は出典の「小町の鯛腹」をもじって、そこに「をかしみ」をあらわしたのである。「鰯のされかうべ」は前年の節分の時に軒にさして置いた鰯の頭の残骸を指している。

あら何ともなやきのふは過(ぎ)てふぐと汁 (延宝五年・江戸三吟その二)

これは思ひもよらぬ仰かな、いづくまでもお供とこそ思ひしに頼みても頼みなきは人の心なり、あら何ともなや候(謡曲・船弁慶)

〔註〕出典は「船弁慶」の武蔵坊弁慶に対する静(義経の妾)の言葉である。出典の「あら何ともなや候」は「あゝ、なんとかならぬか、たよりないことであるよ」の意。句では「あら、なんともなかったよ」の意。只言葉の「をかしみ」の句である。「ふぐ(河豚)と汁」は「ふぐ汁」と同じ。謡曲からは「あらむざんやな甲の下のきりくす」(「おくのほそ道」の太田神社の条)もとっている。この句は桃青・信章・信徳三吟百韻の発句で、これに対して信章が「寒(さ)しさって(しさるは退くの意)足の先迄」と脇を附けている。なお謡曲には「あら何ともなや」の用例が他にも幾つかある。

山崎宗鑑が旧跡

有(あり)がたきすがた拝まん杜若(元禄元年・泊船集)

宗鑑が姿を見ればがき(餓鬼)つばた 近衛殿
のまんとすれど夏の沢水 宗鑑

(宗鑑の逸話)

〔註〕この句については、貞享五年四月二十五日付惣七(猿雖)宛の芭蕉書簡中に「山崎宗鑑屋舗(註・山崎の八幡社附

近に在ったといわれる)近衛どのゝ宗かんがすがたを見れば餓鬼つばたと遊(ば)しけるをおもひ出て、有難きすがた拝まにかきつばたと心のうちに云て卯月廿三日京へ入」とある。宗鑑の逸話として口碑に伝わっている出典(註・これには異説がある)を踏んで、作者がその當時を思いしのんだ句である。餓鬼つばたは、宗鑑の姿が餓鬼のように瘦せこけていた形容で、それに「かきつばた」をかけている。

有(あり)がたき雪をかほらす南谷(おくのほそ道・羽黒山)

薫風(かま)自(より)南来、殿閣生(み)微風、(古文真宝前集・足(す)柳公権聯句・此二句公権の句也)

〔註〕この句の初案は、其角編「花摘」に見える歌仙の発句「有難や雪をめぐらす風の音」であって、それに対し露丸が「住(む)はど人のむすぶ夏草」と脇を付けている。「有難や」は盛夏なお涼しい南谷別院を提供してくれた会覚に対する謝意と、羽黒権現の靈験とを含めている。

あるは摂政公(せつしやうこう)のながめにうばはれ(元禄元年・笈の小文・吉野)

みよし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は来(き)にけり(新古今集春・摂政太政大臣)

〔註〕摂政公は藤原良経。歌集に「秋篠月清集」がある。「ながめ」は詠歌の意。出典の歌の「ふりにし」は、「降りにし」に「古りにし」をかけている。この歌には「春立つ心をよみ

侍りける」の前書がある。

或は人家に行(く)人を告げ(元禄三年・鳥の賦)

鳥とふおほをそ鳥のまさでにも来まさぬ君をころ
くとぞ鳴く(万葉集・東歌)

〔註〕出典の「鳥とふ」は鳥というの意。「おほを(う)のなまり」そ鳥は大虚言鳥。「まさで」は真実の意。「ころ(ら)のなまり」くは、鳥の鳴声に「子ろ来」をかけている。鳥という大うそつき鳥が、子ら(あの人、愛人を指す)が来ると鳴くので、いま来るか(と待っていたのに、実際は来やしない、さてはだまされたのかの意。東歌の質朴さが出ている。歌の「ころく」を「人家に行く人を告げ」と云ったのである。

闇中に莫作して(おくのはそ道・象潟)

暗得雨奇晴好句、暗中摸索識三西湖(策彦和尚詩集)

〔註〕莫作は模索の当字、手さぐりすること。出典の詩の「雨奇晴好句」は前の「雨も又奇也とせば……」の項の出典に見える詩参照。

〔い〕

いかで都へと便求(め)しも断(理)也(おくのはそ道・白川の関)

便あらばいかで都へ告げやらむ今日白川の関はこ
えぬと(拾遺集別・兼盛)

〔註〕「いかで都へ……」は、出典としてあげた兼盛の歌を踏んでいふことはいうまでもない。「断り也」は、もっともである、無理がないの意。兼盛は平氏、平安朝時代の三十六歌仙の一人。この歌は陸奥守として下って来た時の詠である。

いくしも(幾霜)にころばせをの松かざり(貞享三年・栗集)

いささめに(註・少しの間に)時まつ間にぞ日は経ぬる心ばせをば人に見えつつ(古今集物名・紀のめのと)

〔註〕句の「ころばせを」は「ころばせ」に「はせを」(芭蕉)をかけたのである。出典の歌意(時はしばしとまらず過ぎ去って行くが、心ばせは変らぬ)を踏んで、句意は幾度かの霜にもめげず、変らぬ松の緑(節操の意をふくむ)の心ばせを示す松かざりであるよと、年頭に際して自分の意気を示したのである。

石山の石より白し秋の風(おくのはそ道・那谷)

みよし野の高嶺のさくら散りにけり嵐も白き春の
あけぼの(新古今集春・太上天皇)